

〔講演記録〕

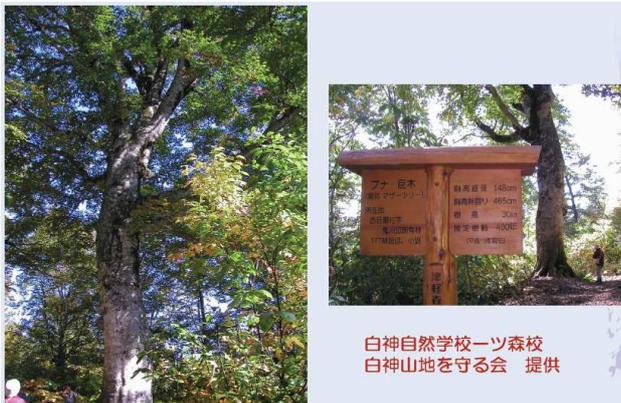
白神山地における自然再生の取組み

NPO 法人白神山地を守る会 代表理事 永井 雄人

白神山地が世界遺産になったきっかけは、昭和 50 年代に持ち上がった青森と秋田をつなぐ青秋林道問題というスーパー林道建設問題です。これは、林政史上初めて、民間による反対運動によって公共事業が止まったケースです。その結果、広大なブナの原生林が豊かに残り、森林生態保護地域として、そしてユネスコの世界遺産登録となりました。平成 5 年 12 月に世界遺産登録となり、今年でちょうど 20 年になります。現在、青森県と秋田県では、この 20 周年を記念した色々なイベントが予定されています。この 20 年の中で、色々なことがありました。皆さんに、白神の世界遺産について知ってもらうため、映像を通してお話をしていきたいと思えます。

青森県側で白神山地を抱えているのは、西目屋村、鱒ヶ沢町、深川町の 3 町村です。秋田県側は、藤里町、八峰町が白神山地と接しています。約 17,000ha のうち、4 分の 3 を青森県、4 分の 1 を秋田県が占めています。秋田県は、全面的に入山禁止となっていますが、青森県は、平成 16 年に鳥獣保護区とともに、入山を届け出て核心部分に入れることになりました。

これは、西目屋村の津軽峠のマザーツリーとされているブナです。約 400 年のブナとされています。ブナは、基本的には 150 年から 250 年しか生きない木ですが、このマザーツリーは、ロシアからの冷たい風と偏西風の風が日本海で水蒸気を発生させ、奥羽山脈にぶつかり、そしてそこに雨や雪を降らせるという特異な環境の中で、根付いたブナです。日本ブナという種類のブナになります。太平洋側では、犬ブナといいまして、樹脂が全く違うブナです。世界的には、アメリカブナ、ヨーロッパブナ、アジアブナ等の種類がありますが、まさに白神山地のブナは、日本海がなければできないという、非常に高温多湿の中で生まれた種類になります。



マザーツリー



ブナの木

ブナの木をもっと近くで見ますと、まだらな斑点模様があります。これは、場所によって全然違います。根っこの下のほうに、コケがたくさんついている部分、それから上のほうについている部分、それから北西の偏西風の風が吹きますから、風が強く当

たる西側部分についているなど、色々な特徴を持っています。そして風をまともに受けない部分のブナは、まっすぐに伸びていきます。日本海側に近い白神岳に登っていく登山道のブナは、上の方の枝は偏西風の強い風の影響で曲がった形のブナの木になっていきます。



クマゲラ

これは、白神山地が世界遺産登録されるきっかけになった天然記念物のクマゲラというキツツキ科の鳥です。頭のとっぺんが赤く、くちばしはだいたい7cm から 8cm、目は、黄色の中に黒い点があって、胴体は黒いマントを着ています。ブナの木の中は、およそ 200 年過ぎますとだんだんと空洞化していきます。樹皮は非常に硬いのですが、春先には、その中に2羽から3羽の子どもを生みますが、本当に残るのは一羽です。このクマゲラですが、我々の調査でもここ 2、3 年で発見されなくなっています。この状況は、非常に問題ではないか、と環境省とも話をしています。クマゲラは、北海道に 200-300 羽くらいいると言われていますが、本州産のクマゲラはなかなかいません。北限は、白神山地、南限は定かになっていません。山形県で見つかったと言う人もいますが、確実に見つかったと言われているのは、秋田県の森吉町というところです。環境省は、北海道と白神山地のクマゲラは同類だから絶滅危惧種ではないと言いますが、私たちの考えでは、渡り鳥は 100km ぐらいのスピードでまっすぐ飛んでいく鳥ですが、クマゲラは林の中で三角飛びという枝から枝を飛ぶ

鳥ですから、それが津軽海峡を渡るか、っていう話ですよね。鳥類の学者の先生は、それは無理だろうということです。天然記念物のクマゲラの北限はどこになったんだろうという話で、今は白神山地では発見されていません。世界遺産に登録された理由の一つもこのクマゲラの生息が発見されたことに由来しています。核心部分に、クマゲラの森という名前が残っています。その森は、非常にブナがきれいなところですよ。



春の山菜と花（4月～5月）

白神山地には、このようにザゼンソウ、みずばしょうなど非常に綺麗な花々が四季折々咲き乱れています。特に、春先には高山植物が 1,000m 級以下の地域で生えている特徴があります。



植林体験ツアー（6月～10月）

6月から10月は、白神山地の中で植林をやっています。白神山地も世界遺産になる前は、スギの拡大

造林計画で、ブナを切りすぎをたくさん植えられたところが 1200ha あります。ブナの木は、木へんに無と書いてブナと読みます。ブナは、価値がなかったのか、というところではなくて、色々な価値がありました。家具材や青森県ではりんご箱などにブナの木を使っていました。また里山では、ブナの木は薪や炭として使っていました。今、私たちが林野庁と話をしていることは、スギが植えられたところを自然再生計画でもう一回、広葉樹の森に戻そうという運動をやっています。これを「ブナの森、復元・再生活動」と言っています。



究極のエコツアー 7月

森林生態系地域、いわば世界遺産の核心地域に入るときには、必ず「森林生態系保護地域」と書かれた表示板があります。上の写真は、「クマゲラの森」と言われているところです。核心部分まで入っていくときは、すぐには帰って来られないので、野営の準備をして入っていきます。



夏休み遊々の森サミット 8月

林野庁では、遊々の森という制度があります。子供たちが林業体験の活動ができることを遊々の森として設けています。全国から子供たちが集まってくる、林業体験をしながら環境教育をしようという活動の受け入れを行っています。

私たちが「白神山地を守る会」を立ち上げたのは、世界遺産登録された平成 5 年です。その後 10 年間、色々な活動をしてきました。エコツーリズムという考え方がありますが、白神山地が世界遺産になってから 10 年間、取り組んできて思ったのは、地元の人達が白神山地と関わる事が少ない事に気が付きました。実はここは、ツキノワグマや猿がいっぱい獲れて、昔はここら辺の人達は、それらを獲って食べていました。しかし、鳥獣保護区になったことで、獲ってはいけない、と締め出されてしまいました。入山禁止ですから、今まで山へ入ってキノコを採ったり、山菜を採っていたのに、世界遺産になったことで、そこで暮らす地元の人達も出て行け、ということになり、何も獲れなくなりました。そのため、地元の人達から、白神山地に対する意識が、どんどん抜けていってしまいました。

先ほど、スーパー林道問題について触れましたが、なぜ反対運動が起きたのかというと、実は昭和 20 年 3 月未明に、世界遺産まで 45km と一番長い川である赤石川で鉄砲水が発生しました。その川の上流にあった雪溶け水が雨の影響で一気に流れてしまい、大然（オオジカリ）集落というところが全滅しました。そういうことがあった赤石川の上流に、スーパー林道を作る計画が上がったのです。最初は、秋田県の藤里町側に林道計画が持ち上がり、過去の出来事が繰り返されてはいけないという反対運動となりました。

当初計画は藤里町の粕毛川の上流にコースがあったのですが、地元の反対で青森県側にふったのです。昭和 20 年にそういう災害があった大然集落の次の集落が一つ森集落ですが、その住民が署名運動をしました。その集落の約 8 割、9 割近い署名が集まり、それを当時の青森県知事に出したところ、それなら止めようと、判断されました。青森市に三内丸山縄

文遺跡という遺跡がありますが、そこも、野球場の建設をしていたら、縄文遺跡が見つかったため、建設が中止になったところです。公共工事を進める知事はいても、止める知事はいないですよ、そういう知事さんが青森県知事でした。

平成 15 年に、鱒ヶ沢町の町長さんから、一ツ森小学校が廃校になったので、それをうまく利用して、人がどんどんいなくなる過疎地域を何とかできないか、という話がありました。白神山地と関わった形で雇用の場を創ることも考え、この小学校を「白神自然学校一ツ森校」として、平成 15 年に立ち上げました。グリーンツーリズムの拠点として、農業体験や林業体験をしたり、おじちゃんおばちゃんがこの学校の講師になって、全国から来る子供大人に、色々な山の知恵を教えていこうという学校です。



夏休み自然体験塾 8月

こうして小学校を立ち上げ、子供たちと山や川、海に行ったりして、子供たちを受け入れてきました。川で遊んだことがない子供たちが非常に多いですね。山菜を見つけて、「これ食べるぞ～」と言うと、「草食べるの?」という反応をします。また、熊やウサギが良く獲れるので、その肉も食べさせます。近所の農家さんの土地を借りて芋を作ったり、白神山地の中では、昔のマタギ小屋を修理して、マタギという熊を獲っている人達がどういう生活をしていたのか、などを、現役のマタギが子供たちに教えるようにしています。



子ども達の林業体験 8月

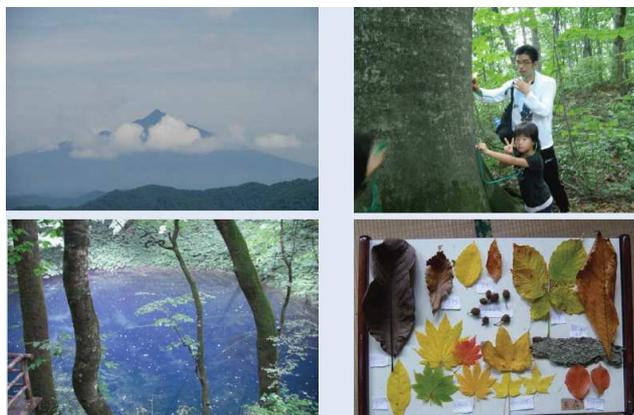
小さな子供たちには、遊々の森で林業体験をしてもらいます。手のこを使うと、子供たちは使い方がわからないので、手を切ります。でも手を切ってはじめて、「こういう使い方をしてはだめなんだな」ということがわかるわけですから、そういうことを小さいうちに経験しないとわからないですよ。こうして、伐り出した木を運び出し、近くのペレット工場に持って行って、ペレットにしてみる、ということも今私たちは子供たちに体験させています。



企業の植林

そして、企業の植林活動も活発です。会社の社員同士で来られる方もいらっしゃいますし、毎年開催している植樹祭に、全国から集まってきて、木を植える人達もいます。実は、白神山地で木を植えるという事は大変です。何が大変かという、植生の先生方から、「種、木、苗木はどこからもってきたん

だ」というような話が必ず出ます。他から持ってきたものを植えてはいけない、ということで、私たちはブナを種から育てる事もやっています。



岩木山・青池・ブナの音・葉っぱ

ブナの木に聴診器をかけて音を聴くということもやっています。聴診器をかけても音が聴こえないだろう、という人もいっぱいいますが、4月から7月までは、落葉広葉樹は水をいっぱい吸いますから、音が聞こえます。そして、カエデや広葉樹の葉っぱをいっぱい集めてきて、木の勉強をしたりすることも環境教育としてやっています。

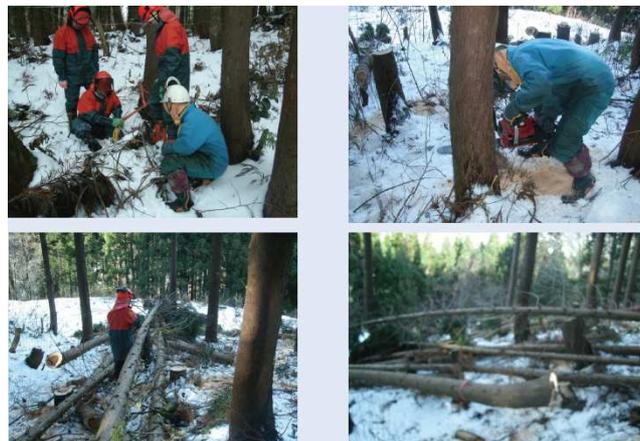


秋のキノコ狩り体験 10月~11月

これは、去年のキノコです。キノコの種類は、なめこです。なめこって、丸いプチとしたものだと思うかもしれませんが、天然のなめこというのは、傘が開いています。どれだけ口の大きい人でも、一口では食べられないくらいの大きさのものもあり

ます。また、私たちは、ナラの木の下からまいたけを獲ります。ブナハリタケという白いキノコもあります。広葉樹の森では、たくさんのキノコが採れます。ツキヨタケという猛毒のキノコもあつたりします。

気を付けましょう。



遊々の森・林業体験 12月

冬は除伐、間伐をして、スギの木と木の間をどんどん広げていきます。木を引っ張る時に下が雪だと非常に出しやすいです。昔は、馬が引っ張っていましたが、今は、引っ張るトレーラーみたいなのがあります。冬にこれをやるのが林業の作業になっています。そして、間伐した木材を学校まで運んできて、1年くらい置いて乾燥したものを製材して、学校の建物の修理に使ったり、木工品を作ったりしています。



冬の自然体験塾 1月~3月

自然学校は、薪ストーブですので、自然学校に来てもらった子供や大人たちも、まずは木をチェーンソーで切って、薪割りをし、そしてストーブで燃やす、という体験をしてもらっています。キャンプファイヤーなどにも使ったりします。近くには、スキー場もあります。

いった、自然に対する接し方を覚えているな、と感心します。日本人は、都会で歩いているスピードと山の中を歩いているスピードが一緒です。せめて山の中に入ったら、スピードダウンして、ニュートラルにして人生も含めて一回振り返るような感じがほしいですね。こんなスピードでいいのかな、ということ日本人は考えなければいけないと思います。そんなことを海外の人達と歩いていると考えさせられます。



自然学校の味と野外食

これは、白神自然学校が誇る季節の山菜料理です。上の写真は、グリーンカレーです。このグリーンの色は、青唐辛子です。山の中に行きますと、山にあります山菜等々を採ってきて、参加者自身で料理もします。また、間伐材で箸も作っています。



このようにして、自然学校では山仕事や里での暮らし体験など色々な体験をすることができます。



海外から参加した学生達

それから、自然学校には海外からのメンバーも非常に多く来て、お手伝いをして帰ります。彼等は、日本人と違って、ワンダーリングといい、森の中をゆっくり歩いて、深呼吸して、リフレッシュすると



マタギ小屋・セラピーロード

マタギ小屋のところには池があり、ゴムボートがあります。ここに行くためには、赤石川を渡らなければならないため、胴長をはいて渡ります。池は、養殖池として森林管理署から、鯉を飼う目的で借りています。



グリーンツーリズム体験

グリーンツーリズム体験では、地元の農家宅を訪問し、スイカやメロン作り体験をしています。農業を通して、地元の人達と交流します。地元の人達は、都会の人達と交流する事によって、生きがいも出てくるし、小学校はなくなりましたが、全国から子供さんがたくさん来る事によって、お年寄り生きがいを感じています。

大人達にもエコツーリズムを体験してもらいます。

私たちはガイドをしているというわけではないのですが、白神山地のことをもっと知ってもらうことが大事なので、一緒に山に入っていきます。



大人達のエコロジー体験ツアー

2004年に秋田県の能代市で白神市問題という、市町村問題がありました。能代市は、実は白神と隣接していないのですが、白神市という名前を付けたかったのです。しかし、私はその決定を止めました。

白神市問題

- ◆ 2004年秋田県能代市と山本郡六町村でつくる法定合併協議会が8月30日、2005年10月の合併後の名称を「白神市」に決定した。白神山地世界遺産地域を含む岩崎村と深浦町の法定合併協は同二十五日、新町名の候補の一つとして「白神町」を挙げたばかりで、先手を打たれた形になった。

これは、徳川家光の時代に作られた陸奥国津軽郡之絵図という地図ですが、しらかみ嶽は、津軽藩岩崎村（青森県）のほうにあって、佐竹藩（秋田県）のほうにはありません。それをもって、私は白神という名前を独占して使うことに反対しました。そして、秋田県側に出向き、署名を集め市長に提出した結果、住民投票が実施され、90%の人達が能代市を残すべきである、ということになり、「白神市」の名前を使うことは変更となりました。



陸奥国津軽郡之絵図

陸奥国津軽郡之絵図

1645年陸奥国津軽郡之絵図は第三代将軍徳川家光の命により作られた日本初の全国地図です。(約2100分の1)江戸幕府は数回にわたって国絵図を作ったが、正保国絵図は、初めて基準を示し、企画の統一を測った物で画期的な国絵図です。山川湖沼・地殻港湾・陸海路を書き込ませている。

手順としては①下書き ②村の位置・田んぼの面積・木の書き方・縮尺を入れるように指示している ③道をはっきりとるように指示、特に村に入る道をはっきりさせている。全国65国があり、大江戸城の松の間(800畳)に広げ、狩野派の絵師達がつなぎ合わせ、老中や将軍がみた物と思われる。特に津軽絵図は、アイヌ村がありアイヌに対する意識が相当強く記載されている。

ここで、白神山地の特徴を整理します。白神山地というのは人為的な影響を最も受けていない、原生的なブナ天然林が群生しているところなのです。ここが非常に大事なポイントです。ブナの天然林には、ブナーミズナラ群落、サワグルミ群落等をはじめ多種多様な植物が生育しています。サワグルミというのは、はがすと油がいっぱいあるので、マタギ小屋の屋根に使われていたと言われています。また、高緯度にも関わらず、ツキノワグマ、ニホンザル、クマゲラ、イヌワシ等をはじめ非常に多くの動物が生育し、白神山地全体が森林博物館的景観を呈しています。そのお陰で、自然学校では、熊肉定食を出しています。

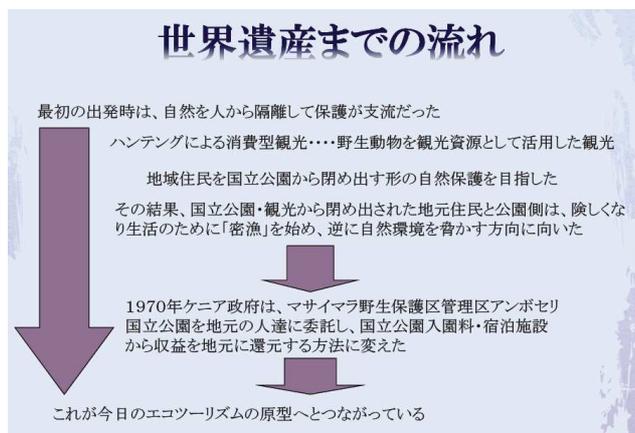
特に世界遺産地域は、人為的影響が少なく最も良い原生状態が保たれており、その価値は地球的に見ても極めて重要であると評価されています。ブナ林は、動物の餌となる植物が多く、他の森林に比較して豊富な動物が成育しているほか、水源涵養機能や地表浸食防止機能等も高く、このような多面的な機能や美しさは、近年日本でも高く評価されています。

自然保護運動の歴史

- ◆ 1970年後半から自然保護が叫ばれる
- ◆ 1972年 世界遺産スタート
- ◆ 1982年3月1日アメリカのイエローストーン・ナショナルパークが第一号の国立公園指定（立ち入り禁止区域をつくる）
- ◆ 1879年オーストラリア
- ◆ 1898年メキシコ・アルゼンチン・スウェーデン
- ◆ 1931年日本 国立公園法
- ◆ 1934年 雲仙国立公園が第一号
- ◆ 1978年世界初、ガラパゴス諸島が自然遺産
- ◆ 1993年屋久島と白神山地が世界遺産 自然遺産登録
- ◆ 2002年国際エコツーリズム年

自然保護は、1970年代から叫ばれるようになり、1972年に世界遺産という制度がスタートしました。アメリカのイエローストーンという、スギの木の大きいのが国立公園の第一号として指定されました。日本では、1931年に国立公園法ができ、1934年に雲仙国立公園が第一号に指定されました。1993年には、屋久島と白神山地が世界自然遺産登録され、現在は、

このほかに知床半島と小笠原諸島が加わって、日本の自然遺産は4箇所になっています。



その中で、もう一つ知っておいて頂きたいことは、世界遺産の最初の出発地の考え方というのは、自然を人から隔離して保護するというのが主流だったことです。当時は狩猟が非常に流行っていました。そのため、地域住民を国立公園から閉め出す形での自然保護というのが主流になりました。白神山地もそうですが、熊を獲っていた経緯があります。また、アフリカの人達も、そこで生計を立てていたのですから、締め出された結果、結局出てくる結論は、密漁を始めたという事です。生きていくためには、狩りをしなければならいわけですから、このせめぎあいになります。

1970年代に、ケニア政府はマサイマラの管理区を地元の人達にも還元するという形をとって、共存共栄というシステムを作っていました。

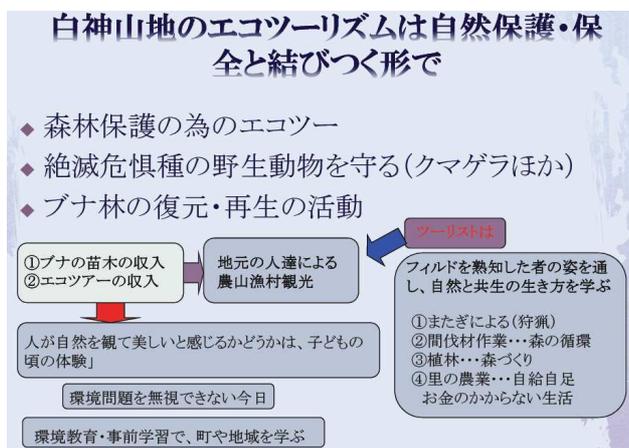
先日、環境省の方が、今後の鳥獣保護区をどうしますか、という話を聞きに来られたので、「マタギ文化」をここで終わりにするわけにはいかないので、鳥獣保護区にするのはいいけれども、マタギには特別な権利を与えて、もう一回「マタギ文化」というのがきちんと残るような体制を考えていただきたい、という意見を申し上げました。

この10年間、マタギの人達は、熊がいる場所がわかっても獲れない、という状況になっています。生活の糧というのもありますが、食物連鎖にも大きく影響しています。実は、白神山地にはツキノワグ

マが非常に増えております。特に一昨年は、ブナがたくさん実をつけたので、どんどん熊が出てきて、春先には子供を生みました。また、ブナがたくさん実をつけたときには、ハタネズミというのが出てきて、ハタネズミが出てくると翌年には必ず蛇がたくさん出てきます。蛇がいっぱい出てきますと、イヌワシやオオタカが餌として飛び回り、繁殖して子作りをします。こういう食物連鎖が白神山地でも起きております。したがってそういうことをきちんと理解し、すべてひっくるめた上で、世界遺産ということにしなければいけないのではないかと、思っています。つまりマタギの狩猟も自然遺産の価値の一つなのです。

そして、私たちはブナの苗木を作って、販売し、それを山に植えてもらう等のエコツアーの収入で地元の人達に農山漁村観光というのをやってもらっています。そして、この地元の人達が元気になって、白神山地の山を守る事が一番大事である、と思っています。外から来た人達には、お金を落としていただいて、そして地元の人達を元気にしてくれる仕組みを作ったのが自然学校です。

そしてまた、子供の頃からの色々な体験をすることが大事であると思っています。環境問題を無視できない今日、こういう環境教育をやっていく必要があると思っています。また、マタギによる狩猟、間伐材作業、植林、里の農業を子供、大人の人達にも知ってもらいたいと思っています。



私たちが行っているエコツアーリズムは、森林保護をよく理解してもらうためのものです。また、クマゲラ等の絶滅危惧種の野生動物を守ることです。私がクマゲラの巣等を見つけた場合には、なるべく遠ざけるようにしたり、わかっている人には言わない、教えない、ということをやってきました。

私たちは、白神山地における広葉樹の苗床作りと植林地の整備事業として、休耕田を利用して、ブナの苗木を育てています。

そして、ブナ林の復元・再生活動です。本州にある世界自然遺産は白神山地だけです。黄砂等の影響でおかしくなったり、温暖化で2度温度が上昇したら、ブナ林の6割、7割が全滅するのではないかと、言われています。この本州の白神山地がそういうことになったということは、日本の環境がものすごく悪くなってきているという事だと思えます。



ブナの種拾い

白神山地を守る事は、日本の環境を守る事にもつながると私は思っています。

ブナの木の下にネットを敷き、ブナの種を人海戦術で拾っていきます。ブナの種は、そばの実の3倍から4倍くらい大きい種です。



こうして集めた種を水の中に入れ、浮いてきた種は中身が入っていないので、抜いて選別します。そして殺菌処理をし、乾燥したものを植えていきます。



秋の掘り起こし・仮植作業

秋には、全部掘り起こし、根切りをし、根を3分の2取ってしまいます。根を切ったら、苗木を斜めに傾けて植え替え、春にまた起こします。この作業を仮植作業といいます。



ブナの苗床づくり

耕運機で土を耕し、畝を作り、種を蒔いて、土をかぶせ、その上に藁を敷き詰めます。冬、雪の下は結構暖かく、藁と藁の間から芽が出てきます。地上に10cm出れば、根も10cmまっすぐ伸びていくというのがブナの特徴です。



その後の苗床作業

そして、30cm四方に植え替え、これを3年から4年繰り返します。そうやってどんどん根を太くしていき、その後、自然界に戻します。このことによって、ブナの根が地面に残るということになります。秋になると葉っぱが茶色くなって落ちていく。そして、また新しく繰り返されるというわけです。

光合成の生き物ですから、葉っぱで光を吸収し、そして水分を吸収します。ブナの葉っぱには葉脈がありますが、撫でてみますと産毛が出ています。この産毛が水分を真ん中の葉脈に集めるような仕組みになっています。顕微鏡でよく見ますと、ブナの葉っぱはいかにして水分を葉の真ん中に集めて、それを根っこの下の部分に集めていくか、ということがよくわかります。250年もののブナですと、腐葉土の

下の木の根っここの部分に3トンから5トンの水分を溜めるといわれています。「緑のダム」と言われる由縁です。ブナの広葉樹の下には、水分が溜まっています。ブナの根は、毛細血管みたいに細かく、そのため地中深くなくても土や岩をキャッチすることができます。スギの木の根は太いため、大雨が降ると腐葉土がないので、水分を溜めることができず、表面で一定の水が溜まると表層雪崩のように流れていき、甚大な災害を起こします。それは、山の手入れをしてないから、当然のことなのです。最近のゲリラ豪雨のような場合、水を貯水する能力がないために、民家が押し流されたり、道路が決壊した事故が全国で起きています。あれは、天災ではなく、山の手入れをしないために起こる人災だと思います。

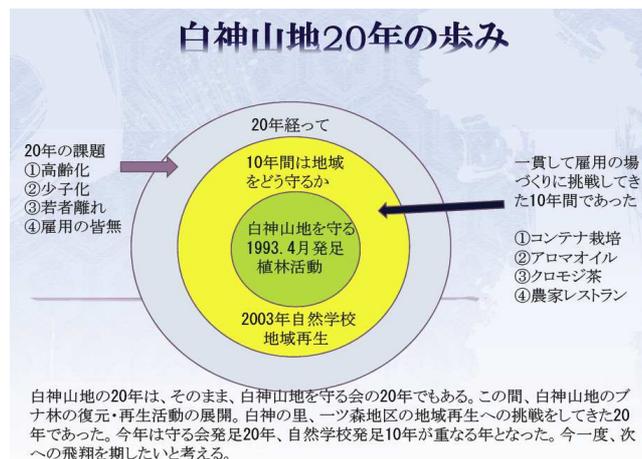
1年目	大豊作の年
2年目	皆無の年
3年目	並作の年
4年目	皆無の年
5年目	大豊作の年



< 問題点 >
 ① 2年目と4年目のブナの実が皆無の時は採種ができず、苗床でブナを育てられない
 ② ブナの種を苗床で育てる年は、ブナの苗木を山に戻すことができない

ブナの種がつく周期

ブナの種は毎年なるわけではありません。例えば、今年大豊作だったら、次の年は皆無です。種が入っている割合は、10個あれば1個あるかどうかで5年ぐらいするとまた大豊作になります。これがブナの種の大きな特徴です。したがって、毎年植林をするというのは、正直難しい技です。それをどうやって調整しているかと言いますと、私たちは、苗木を育てていく中で、低い苗木を後にして、成長の早いものを先に植える、という苗木の調整をしながら植林をしていきます。ビニールハウスも使って、色々なスタイルで調整を行っています。その種は、白神山地からとった種を使います。しっかり管理しながら、山に戻すことによって、ほかの種が混じらないように、ということを考えながら植林活動を行っています。



私たちの会は、最初は植林活動から入りました。最初の10年間はこの地域をどう守るか、ということを一生涯懸命考え、地域再生をやってきました。20年経ってみたら、少子高齢化、若者の雇用の場がないという事に気付きました。そして当初は「山を守りたい」と思い山に入ったのですが、今は「山を守る人も守りたい」、そして、この地域の中に、ここで頑張る人達をどう作っていくか、ということが大きな課題だと気づき、地域の人達を巻き込んだ活動をしています。自分たちの趣味の世界で、自分たちの好きな事だけをやっている世界だったら、ものすごく楽なのですが、地域の人達と会話をしながら、そして地域の人達に自分たちの住んでいる地域をより良くしていこうと話し、その人達の雇用の場を作りながら、絡ませていくという事は非常に難しいことだ、と感じています。しかし、次の時代に向けてもう一歩開かなければいけないと思っています。その意味では今一度、「世界遺産になってよかったのか、悪かったのか」この佳節にみんなで考えなくてはならないと思います。

2012.12-11-20日白神物語-白神からのおくりもの写真展仙台展

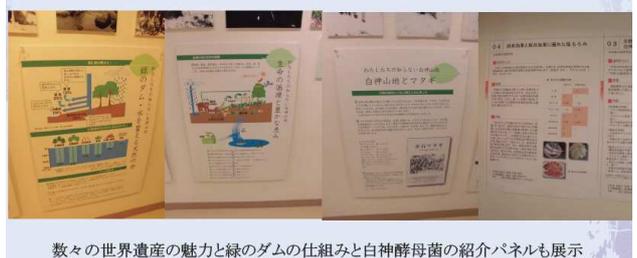


写真展会場を訪れた伊奈かつぺいさん 白神山地の世界遺産を証明するユネスコの楯 会場入り口の看板

白神周辺市町村の物産販売と、社会貢献活動とマタギの写真紹介



これは、去年の12月11日から20日まで、「白神物語-白神からのおくりもの写真展」というのを仙台で行った時の様子です。伊奈かつぺいさんとマタギの大谷石かつさんのトークショーをやり、大変好評でした。白神山地の世界遺産を証明するユネスコの楯を展示したり、地元のお菓子やお茶などの物産販売もしました。白神の低木のクロモジの葉っぱからお茶を作り、クロモジ茶の試飲会や、アロマのエッセンシャルオイルも作ったりしました。



数々の世界遺産の魅力と緑のダムと白神酵母菌の紹介パネルも展示

今、「白神酵母菌」といって、白神から取れた酵母菌で作ったパンが非常に売れています。

2010年の生物多様性の名古屋会議でも、種の保存や温暖化の問題等色々な議論が出てきましたが、その中で一番議論されたのは、アメリカは開発途上国から貴重な資源を搾取して、それを高く売っているという、いわゆる南北問題については激しく議論されました。開発途上国は、われわれにもっと還元されてもいいのではないかと訴えていました。

それまで、日本には生物多様性の法律がありませんでした。そして、初めて昨年法律ができ、生物をどう利用していくか、ということが議論されつつあります。

白神山地の土壌から発見された非常に良い状態の酵母菌もこれからどう守っていくか、ということがあります。この白神酵母菌に一番初めに着目した、秋田県立食品衛生研究センターに対して、酵母菌が欲しいと名乗りを上げたのは中国です。次はイタリアでした。特許権を取られてしまったら大変です。このような生物多様性の取り組みが、名古屋での国際会議で議論され日本も20項目の取り組み項目が明らかにされました。

企業/市民の取組：ビジネスと生物多様性

日本経団連生物多様性宣言(2009年3月)
・7つの宣言と行動指針

環境省
民間参画ガイドラインの作成(公表)(2009年8月)
・事業者が生物多様性に配慮した活動を自主的に行動する指針

○生物多様性民間参画パートナーシップ発足(2012年6月現在、494企業・団体が参加)

生物多様性民間参画パートナーシップ
・宣言及び活動内容の情報発信と共有
・取組の優良事例に対する表彰
・国際的な情報共有・経験共有

生物多様性民間参画パートナーシップ行動指針

参加事業者
↑
政府機関など
↑
NGO、研究機関、学生団体など
↑
経済団体など

生物多様性民間参画ガイドライン

白神山地を守る会は2012年加入しました

生物多様性民間参画パートナーシップ行動指針

1. 自然の恵みに感謝し、自然循環と事業活動との調和を志す
2. 生物多様性の危機に対してグローバルな視点を持ち行動する
3. 生物多様性に資する行動に自発的かつ着実に取り組む
4. 資源循環型経営を推進する
5. 生物多様性に学ぶ産業・暮らし・文化の創造を目指す
6. 国内外の関係組織との連携・協力に努める
7. 生物多様性を育む社会づくりに向け率先して行動する

ビジネスと生物多様性

私たち「白神山地を守る会」は、経団連が行っている生物多様性環境民間参画パートナーシップへ、2012年に加入し、民間側から生物多様性の問題をどう捉えていくか、ということを実際に考えています。

「自然を守る」と言葉で言うのは簡単ですが、自然を一番壊しているのは人間ですから、自分たちの快適な生活と自然とどう共存するか、どう向き合い、それを次の世代にどう伝えていくか、ということが今もっとも大切な課題になると思います。その中心となる大人が自然を知らない現実には怖いですね。

私にとって白神山地というのは、原点に帰れる場所です。よく山に入りますが、入ると3日か4日くらいは帰ってきません。入ると自分が何年間か歩んできた中で、自分を振り返る、そういう気持ちを自然界は起こさせてくれるのです。私たち人間の生活自体が、もの凄いスピードで走っている世の中ではないかな、と思います。

私は、白神山地からの話しかできませんが、是非白神山地みたいな自然が今後、私たちの人間活動の努力で、少しでも長く自然遺産として残る事を願っています。そして、私たちの生活の中で少しでも、翠の地球の事を考える機会になってもらえれば、と思ってお話をさせていただきました。本日は、どうもありがとうございました。

著者プロフィール

永井 雄人 (ながい かつと)

1952年、青森県生まれ。数年前までマスコミ関係の仕事に従事。現在は、白神山地の自然保護に専念され、NPO 法人白神山地を守る会の代表理事を務められている。多くの受賞歴があり、著書も多数出版されている。